

ポートフォリオ活用の現状と課題 —A園0歳児クラスにおける試行的試み—

Current Status and Issues regarding Utilization of Portfolios —A Trial Study on 0-year-olds' Class at A Certified Center for ECEC—

高村 真希^{*1}、浅香 聡彦^{*2}

要旨

本稿では、保育現場においてポートフォリオを導入・運用したことによる、ポートフォリオの有効性と課題を保育者の気づきや思いより明らかにすることに加え、結果を導き出した要因の考察を試みた。

ラベルワークを用いて分析した結果、ポートフォリオを導入して良かった点からは、「家庭との連絡」「保育者の成長」等の8つのカテゴリーが抽出され、ポートフォリオは保育者や保護者にとって信頼関係を育む架け橋となっていることが明らかになった。また、導入するにあたり課題となる点からは、「写真撮影や写真選択の難しさ」「渡すタイミング」等の5つのカテゴリーが抽出され、保育者が写真撮影から作成、受け渡しに関して課題を抱えていることが示された。さらに、ポートフォリオが有効性を発揮した要因については、A園の「保育者の働き方への配慮」「必要書類の見直し（統廃合）」「育児担当」が大きく関係している可能性が示唆された。

キーワード：ポートフォリオ (portfolio) / 保育の過程 (childcare process)
ラベルワーク (label work) / 保育環境 (childcare environment)

I 研究の背景

子どもたちに質の高い保育を保証するため、『幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（2018）が改訂され、早2年が経った。現在、石川県の保育現場でも保育の質を高めるために様々な取り組みが行われている。保育の質の研究においては、保育の中で子どもがどのような経験（学び）を重ねているのか、その経過を追って捉えること「経験の過程」が重要であるとされ、この過程を丁寧に追い子どもの様子を可視化し、綴っていく手法の一つに「ポートフォリオ」がある。ポートフォリオは個人の記録を

ファイリングしていくことが特徴であり、子どもの育ちを保育者が記載した後、保護者が読むことで、子どもの成長（遊び・生活）の過程を順に見ることが可能である点である。このことにより、保護者が子どもを見る視点に気づいたり、子どもの遊び・生活の変化に気づいたりする。また、評価をする際に「できる（た）」「できない（かった）」「正しい」「正しくない」で評価する見方ではなく、目の前の子どもは何に心を動かしているのか等、興味に変化していく過程を追うことができる。すなわち、ポートフォリオの活用は保育者のみならず保護者にとっても教育的意義は大きいとされる。

先行研究では、ポートフォリオの利点が数多く述べられている一方、保育現場では保育業務が多忙化複雑化している中でポートフォリオを導入することに負担感があるという声や導入の仕方が不明確といった声も聞かれる。そこで、本研究では

^{*1} TAKAMURA, Maki
北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科
保育内容言葉指導法、保育内容言葉Ⅱ、
保育実習指導（保育所）

^{*2} ASAKA, Toshihiko
大徳学園

ポートフォリオを導入・運用したことにより見えてくる「A園0歳児クラスにおけるポートフォリオの有効性と今後の課題」に加え、「結果を導き出した要因」をA園の特徴を踏まえながら、明らかにする。

II 目的

0歳児担任がポートフォリオ^(注1)の導入から運用を行ったことによる気づき(意見)を出し合い、ポートフォリオ導入・運用の有効性と課題を明らかにすることに加え、ポートフォリオが有効性を発揮した要因を考察する。本研究において、ポートフォリオの有効性や導入の仕方を見出すことにより、他園における実行の可能性が見えてくると考える。

III 研究の方法

(1) 対象園の特徴

本研究は、A園でのポートフォリオの導入・運用の可能性と今後の課題を明らかとするため、A園の教育・保育理念をはじめ、保育環境の特徴・保育者の働き方への配慮等を以下に記す。

教育・保育理念：

『子どもの最善の利益を尊重します』～すべての子どもの幸せのために～

教育・保育目標：

『いきいきと活動する子』

- ◎健康で明るい子 ◎友達と仲良く遊べる子
- ◎自分のことは自分でできる子 ◎豊かに表現できる子

保育の考え方：

○私たちは園生活の中で、子どもたちが将来、人間として、また社会の一員として生きていくための基礎(生活の仕方や、社会にはルールがあること、人とのかかわり等)を築いていきたいと思っています。

○また、将来をより良く生きるために、誰かに指示されてするのではなく、自分で考え、選択し、責任を持って行動できる人間になって欲しいと思っています。子どもが成長・発達していくためには、乳幼児期(小学校就学前)のあそびが非常に重要だと考えています。

○子どもはあそびを通して考えたり、想像したり、人間関係を作ったりしていきます。そのため、乳幼児期には、「知識の詰め込み」といった狭義の教育でなく、あそびを中心とした生活全体の配慮が必要です。

○あそびを充実・発展させる上で、園内外の物的環境と人的環境を整えることや、子どもが遊び込めるための時間的空間的な保証と遊具のバランス、子どもを見守り援助する保育者の関わりは不可欠です。このような中で子どもが常に自分で考え、主体的にあそぶことができるように、「日々の保育」を大切に、ゆっくり丁寧に関わっています。

その他の特徴(保育環境の特徴・保育者の働き方への配慮)：

- ① 就労時間内にポートフォリオの作成時間を確保し、持ち帰り仕事を軽減する。
- ② 月のおたよりと個別指導計画を廃止し、ポートフォリオに統合した。
- ③ ポートフォリオを作成する際の非正規職員の役割として、作成自体は行わないが作成の過程(子どもの写真を撮る・一緒に子どものことを語り合う)に携わり、後に正規職員と評価・反省を行うとした。
- ④ 正規職員一人に一台のデジタルカメラとパソコンを支給した。
- ⑤ 育児担当^(注2)で保育を行っている。(子どもの食事・排泄に同じ保育者がいつも同じ手順で関わること)

※教育・保育理念、教育・保育目標、保育の考え方はA園のHPより抜粋

(2) A園におけるポートフォリオとは

A園におけるポートフォリオとは、3・4・5歳児異年齢クラスではA4用紙一枚に写真付きで毎日の保育の様子を示すことをいう。週案に対応して記録することが多いが、子どものつぶやきや思いがけない行動やあそびについてのものもあり、制約はない。また、0・1歳児クラスではA4用紙一枚に写真付きで一人一人の子どもの成長の様子を示すことをいう。月案に対し生活とあそびの両方について記載することで成長の記録とし、毎月保護者からのコメントをもらうことで、

双方向のコミュニケーションツールとしている。

(3) 調査対象者

本研究の対象者は、石川県金沢市認定こども園A園の0歳児保育を担当している正規の保育教諭4名である。4名の保育経験年数とA園での勤務年数等は以下の通りである。

(0歳児クラスの詳細) クラスの子どもの人数：11名 保育教諭：5名(正規職員4名, 非正規職員1名 計5名)

表1 正規職員4名の経験年数等の詳細

	保育経験年数	D園での勤務年数	0歳児を担当した年数	担当人数
A氏	24年9か月	24年9か月	3年9か月	3
B氏	1年9か月	1年9か月	9か月	2
C氏	9か月	9か月	9か月	2
D氏	9か月	6か月	6か月	2

(2019年12月時点)

(4) 調査期間

2019年4月～2019年12月

ポートフォリオは月に1回作成し、保護者とのやりとりを行った。(月末金曜日に持ちかえる)ポートフォリオを6か月実施後、ポートフォリオに関する気づきについてラベルワークを行った。

(5) 倫理的配慮

本調査はA園園長の許可を得て行い、A園の保育者には園長より研究の目的、方法、個人情報の保護、協力者の意思を尊重することを口頭で説明した後、研究の同意を得た。また、個人が特定されないように配慮した。

(6) 分析方法

本稿では、0歳児担当保育者4名にポートフォリオを導入したことによる気づきについて「1.ポートフォリオを導入して良かった点」「2.ポートフォリオを導入するにあたり課題となる点」の2点について質問し、ラベルワークを実施した。ラベルワークの手法は、林(2011)の手法を参考にしながら行った。

〈ラベルワークを用いた理由〉

①分類わけをする過程以前には気づいていな

かった視点や一つ一つの意見の関連性に気づくことができる。②保育教諭の一人一人のさまざまな思いや考えを理解することができる。③少数であったとしても一つ一つの意見をすくいあげることができる。④意見をグループに分類(整理)し、構造的にまとめることができる等の理由からである。

また、保育者一人一人の何気ないコメントの中に今回の研究目的であるポートフォリオの可能性を示すものが現れるのではないかと、実際に子どもと関わる保育者の一つ一つのコメントを吸い上げることでボトムアップ式にポートフォリオの意義を見出せるのではないかと考えたためである。

〈手順〉

- ① 6か月間、ポートフォリオ作成を行ったことによる気づきを一枚一枚丁寧に付箋に書き込みを行った。(付箋は計119枚となった。)
- ② 模造紙上にランダムに付箋を配置し、内容を見比べながら類似するもの同士を集め、グループ化した。
- ③ ②の作業を繰り返し、最終的にはグループを集約していった。また、整理しながらグループに見出しをつけた。この時に、点線を用いて関係性を表す。
- ④ ①～③の作業を行う中で討議を行い、A園の特徴と照らし合わせながら分析を行った。

IV 結果と考察

ラベルワークの結果を「ポートフォリオを導入して良かった点」「ポートフォリオを導入するにあたり課題となる点」の2つの視点で整理していく。

(1) 「ポートフォリオを導入して良かった点」の結果と考察

「ポートフォリオを導入して良かった点」をカテゴリー別に分類した結果、「家庭との連携」「保育者の成長」「チームワーク」「子どもへの見方」「ポートフォリオの見やすさ」「クラスの向上」「仕事の効率化」「振り返りの楽しさ」の8つの大きなカテゴリーに分類することができた。得られたカテゴリーの内容を示したものが図1である。最もコメント数が多かった大カテゴリーは「家



図1 ポートフォリオを導入して良かった点のラベルワークシート

庭との連携」であり、次いで「保育者の成長」「チームワーク」という順であった。また、ワークシートでは各カテゴリーが点線で繋がれ、それぞれの要素が重なり合って相乗効果を生み出していることが記されている。

次項からは、大カテゴリーを一つ一つ詳細に見つめたことによる結果と考察を述べていく。

① 家庭との連携

ポートフォリオの利点として挙げられた8つのカテゴリーのうち最もコメント数が多かった「家庭との連携」においては、保護者とのコミュニケーションの深まりと喜びの共感に関する思いが多く書き残されており、本カテゴリーからは「コミュニケーションの深まり」「喜びの共感」「悩みの理解」「保護者の成長」の4つの小カテゴリーが抽出された。

保育者はポートフォリオを通して保護者と共に子どもの成長を喜び合えるようになったり、保護者の悩みにも寄り添えるようになったりしたこと

により、家庭との連携がスムーズになったのではないかと考察しており、保育者はポートフォリオに記載される保護者からの記載内容に影響を受けていたことは明らかである。この両者は相互に影響を与えているものと予想され、保護者も保育者も互いの記載内容に対して刺激（喜び）を感じることで信頼関係が築かれていったものと思われる。一方、コミュニケーションや共感常日頃から保育者が意識してきたことであるにも関わらず今回改めて多くのコメントが出されたことから、ポートフォリオは保護者とのコミュニケーションや共感を強く生み出すといえる。

次にこのカテゴリーから注目したいカテゴリーは「悩みの理解」である。保護者の悩みを理解するという点についても保育者が当たり前のよう意識してきたことであろう。悩みを理解するという点においては、多くの園で連絡帳が用いられていたが、先行研究でも連絡帳では保護者からの悩みの相談が少ないという結果が出ているように、保護者にとって連絡帳は悩みの相談のツールとし

ては十分に活用されていなかったといえよう。ではなぜ、ポートフォリオでは保護者が悩みを文字として残し、書き綴ったのか。本件については今後さらに深く探っていく必要があるが、現時点ではポートフォリオは保護者にとっては相談のツールとして有効的であったと考えられる。

② 保育者の成長

「家庭との連携」に次いでコメント数が多かったのは「保育者の成長」のカテゴリーである。本カテゴリーからは、「自己成長」「先輩からの学び」「(パソコン)技術向上」「後輩の成長」の4つのカテゴリーが抽出された。コメントを見つめると、保育者が自身の課題と向き合いながら作成を行っていたことがうかがえる。特に文章で子どもたちの成長を伝えることに難しさを感じていた。

本カテゴリーでは、ポートフォリオの作成を通して自分自身の語彙力・文章力の乏しさに気づき、反省し、先輩から学び、次に生かすという作業を保育者自身が行っていることが理解できる。また、「先輩からの学び」や「後輩の成長」というカテゴリーには互いに学び合い成長していった過程が示されている。すなわち保育者自身が主体的にポートフォリオの作成に関わっていたことで起こった「内から起こった学び」であるといえよう。保育者が「一つのポートフォリオを通じてクラス全体で向き合い子ども一人ひとりの共通理解ができる」と述べているように、ポートフォリオを通して一人一人の子どもの成長(姿)を共通理解しながら保育者同士も互いに認め合い、育ちあっていったと考えられる。上記にも述べたようにポートフォリオの活用を通して、保育者自身が「自分との対話」「他者との対話」を行ったことから生まれた結果である。

③ チームワーク

本カテゴリーでは、「クラスの話し合いの増加」「非正規職員の協力」「保育者間の相談」の3つの小カテゴリーが抽出されている。先行研究では、新任保育者が「他の保育者とどのように接すればよいのか」「何を話せばよいのか」という悩みを抱えていると示されているにも関わらず、こ

のような結果が見られたのはポートフォリオを通して、新任保育者が他の保育者と話ができる機会が設けられたからであろう。調査対象クラスではポートフォリオが保育者同士の関係を築く(繋ぐ)架け橋となったと考えられる。

また、ここで忘れてはいけないのは、非正規職員の存在であろう。現在保育現場では多くの非正規職員が活躍しているが、非正規職員の立ち位置も保育現場の課題の一つである。正規職員は非正規職員にどの程度仕事を任せてよいのだろうかと悩み、非正規職員もまた自身がどの程度自分主体で動いていいのかと悩んでいる。対象クラスでは、「部屋メンバー・非正規職員とのコミュニケーションがとれる」「非正規職員が一体となり全体で協力してできている」「非正規職員が協力的に写真を撮ってくれる」といった意見が出されているように非正規職員自身がポートフォリオで使用する写真を撮影することにより、一体感を感じられるような環境が整えられていたことがチームワークの向上につながったといえる。さらに、子どもの写真を全体で撮影することにより、「この子の担当は私」と抱え込むのではなく、クラス全体で一人の子どもを見つめるという眼差しや姿勢で保育を行ったことでチーム力が変化していったのではないかと。育児担当制の利点は先行研究で数多く述べられているが、難点でもある担当保育者が一人で悩み、抱え込んでしまうという問題もこのポートフォリオを通して改善に繋がっていくかもしれない。

④ 子どもへの見方

本カテゴリーでは、「子どもの成長への気づき」「子どもをプラスに見る」「子どもの観察の目」「子どもへの愛しさ」の4つの小カテゴリーが抽出された。本カテゴリーで最も多かったコメントは子どもの成長を感じられる・わかる・嬉しいであった。また、子どものことをプラスに捉えることができるようになったというコメントからは、今までは子どもの行動すべてを前向きに捉えることが難しかったと見とることができる。さらに、「静止状態ではなく動画状態で子どもを見るくせがついてきた」というコメントからは、その場その場(一瞬一瞬)の子どもの姿を捉えること

は重要であるが、その一瞬一瞬をコマ送りのように繋げてみるができるようになったという保育者の見方の変化が示された。このコマ送りのように描かれる姿がまさに子どもの成長の過程であろう。

したがって、上記のような保育者の子どもを見る見方こそが子ども主体の保育（環境構成）へとつながり、子どものあそびの連続性に繋がっていくのではないだろうか。

⑤ ポートフォリオの見やすさ

本カテゴリーでは、「分かりやすさ」と「比較」の2つの小カテゴリーが抽出された。

「写真を入れることで成長の過程が視覚でも伝わりやすい」や「文字のみの成長記録よりわかりやすい」というコメントが多いように、写真で子どもの一瞬一瞬を見ることができることはやはりポートフォリオの利点であったようだ。また、文字では表現し辛い子どもの表情を伝えられることも写真であるから可能となった。

写真を撮るという作業の面においては、「つい写真が撮りたくなる」「写真をたくさんとるようになった」というコメントから保育者が今まで以上に子どもの姿に心を動かし、写真を撮るという作業を楽しんでいる様子がうかがえる。

「比較」のカテゴリーでは今までのカリキュラムとの比較をし、ポートフォリオは作りやすさや作成が楽しいといった保育者の作りたいという意欲がうかがえるコメントが見られる。

⑥ クラスの向上

本カテゴリーからは、担当児以外の子どものポートフォリオの作成に携わったことによる保育者の気づきについてのコメントが多い。「クラスの先生の考えていること（子への援助）がわかりやすい」というコメントがあるように、担当児以外の子どものポートフォリオを作成するということが、一人の子どもへの共通したねらいが持てると共に子どもの姿を多面的に捉える（視る）視点が育っていく。また、一人の保育者だけの見方ではなく、他者の視点も尊重していくことで一人の子どもを主観的かつ客観的に見とることに繋がったと考える。

さらに、「子どもの普段見つけられなかった姿を知ることができた」というコメントからは、一人の保育者では子どものすべてを把握することに限界があるということが示されている。本クラスにおいてこのコメントが出された背景としては、クラス担任一人一人がこの限界を理解していたことで、互いに信頼し、協力をしあって（補いあって）いたのではないだろうか。このような無意識の助け合いが今回の気づきに繋がったと推察した。

⑦ 仕事の効率化

本カテゴリーでは、残業時間（持ち帰っての仕事）が軽減したことに関するコメントが多く見られる。先にも述べたようにやはり保育者の業務過多は保育現場の大きな課題であったようだ。A園の取り組みとしては、指導計画・月のおたよりの作成は廃止し、それぞれの必要要素をポートフォリオに盛り込むといった方法をとった。今まで必要不可欠とされてきた書類を再度見直し、統廃合するということで保育者の負担が軽減し、気持ちにも余裕が生まれ、保育者が主体的にポートフォリオの導入に取り組めた大きな要因である。

さらに、「時間の使い方が上手くなったと思う」「譲り合いがふえた」というコメントからは、勤務時間内に仕事を終わらせることに対する保育者の意識の変化がうかがえると共に、互いを気遣う気持ちが高まったことが見てとれる。そして、保育者の考察でもあるように「文字だけの指導計画より、写真で見える書式になったことで、子どもの成長が見やすくなった」ことにより、今まで以上に子どもの成長を感じとりやすくなり、保育をすることへの喜びはもちろんであろうが、達成感を得られていたことが示唆された。

⑧ 振り返りの楽しさ

保育者の考察として、「作った後、見返すことが楽しみになり、自分の宝物になる」ということが述べられているように、ポートフォリオを作成したことは保育者自身の喜びや達成感に繋がっていると思われる。この子ども個人の成長を写真と文章で追いかける過程は、保育者に保護者同様の子への愛情を育ませたと言える。また、カリキュ

ポートフォリオ活用の現状と課題

表2 ポートフォリオを導入して良かった点のコメント一覧

大カテゴリ	小カテゴリ	コメント	コメント数	
仕事の効率化		持ち帰りの仕事が激減した(指導計画・月のおたよりなどの統廃合)	2	
		文字のみの成長記録より作成時間の短縮になる	1	
		短時間で作ることが出来る	1	
		カリキュラムより私的に短時間でできる	1	
		時間の使い方が上手くなったと思う	1	
		時間のゆずり合いがふえた	1	
振り返りの楽しさ		自分の作ったポートフォリオを見返すのが楽しい	1	
		自分の宝物になる	1	
チームワーク	クラスの話し合いの増加	カリキュラムを見返す時間がふえた	1	
		他者の作ったポートフォリオを互いに見る機会が増えた	1	
		ポートフォリオ作成にあたってクラスの職員みんなで一人の子について話し合いチームワークを高められる	3	
	非正規職員の協力	コミュニケーションを以前よりとれるようになった	1	
		声かけがふえた	1	
		非正規職員一体となり全体で協力してきている	3	
保育者間の相談		非正規職員が協力的に写真を撮ってくれる	1	
		非正規職員とのチームワークの向上	2	
子どもへの見方	子どもの成長への気づき	保育者間で相談しながら作れる	2	
		自分の考えや思いを保護者や職員同士での共通理解に繋がる	1	
		子どもの成長・発達が分かりやすい	3	
	子どもをプラスに見る		細かく成長を見れている	1
			子どもの成長が目に見えて楽しく作れる	1
			子どものプラスの面を見つけられるようになった	1
	子どもの観察の目		子どものよいところを多く見るようになった	1
			子どものマイナスの行動もプラスに見られるようになった	1
			クラスの先生の子ども見方がポジティブになったと思う	1
	子どもへの愛しさ		子どもの行動の意図を考えるようになった	1
			子どもの行動をじっくり観察できるようになった	1
			静止状態ではなく動画状態で子どもを見るクセがついてきた	1
家庭との連携	コミュニケーションの深まり	笑顔な様子や怒り、悲しみなどを表情で表している様子に愛しさを感じる	1	
		1つ1つの行動が愛おしい	1	
		家庭との連携をとりやすくなった	1	
		保護者とのコミュニケーションがとりやすい	2	
		保護者とのコミュニケーションが深まった	1	
		保護者とのコミュニケーションが楽しい	1	
	喜びの共感		保護者と一緒に子どもの成長を喜び合える	1
			保護者側の援助を伝えることが出来る	1
			保護者の方との話題提供にもつながっている	1
	保護者の成長		保護者にはやく渡したいと思える	1
			保護者の人の喜ぶ顔を見るのが嬉しい	2
			保護者の方の反応がとても楽しみになる	2
悩みの理解		保護者の方が毎日楽しみにしてくれている	1	
		父母だけでなく祖父母も楽しみにしている	1	
		保護者からの返信に子どもたちの成長に対し嬉しさ、喜びを感じていることを実感できる	1	
ポートフォリオの見やすさ	分かりやすさ	保護者が見て「家でもやってみよう」と思ってもらえた	1	
		保護者の方が子育ての悩みを文字におこして残してくれることで保護者同士話し合ながら問題・悩みに向き合える	2	
		保護者の悩みを定期的に知れる	2	
		かわいい写真や楽しそうに遊ぶ子どもたちの写真を見ながら作成するのが楽しい	2	
		写真入りなので見やすい・分かりやすい	1	
		写真を入れることで成長の過程が視覚でも伝わりやすい	1	
	比較		様々な表情を一目で伝えられる	1
			写真をたくさんとれるようになった	1
			かわいい表情があればつい写真をとりたくなる	1
			文字のみの成長記録よりわかりやすい	1
			写真もあるから作りやすい	1
			カリキュラムより作りやすい	2
クラスの向上		カリキュラムよりねらいを作りやすい	1	
		以前のカリキュラムの書式より作成が楽しい	1	
		カリキュラムより作る意欲がある	1	
		担当以外の子ども分も作ることでよりその子について知れている	1	
		自分の担当の子だけではなく、子どもたち一人ひとりの普段見つけられなかった姿を知ることができる	3	
		クラスの先生の考えていることが分かりやすい(援助を参考に自分もかかわれる)	1	
保育者の成長	自己成長	他の保育者のポートフォリオを参考に考えることができる	2	
		すべての子どもの行動に興味があり愛おしいと思える	2	
		達成感がある	2	
		語彙力がふえたかな	1	
		自分の思いを整理しながら作ることが出来る	1	
		こんどは、こんなことを体験させてあげたいという意欲がわく	1	
	技術向上		自分の思いをポートフォリオで伝えられる	1
			自分の考えていることが、ことばで整理できる	1
			パソコンが上達する	2
			タイピングが以前よりはやくなった	1
			後輩の表現力の成長が嬉しい	1
			後輩の成長を感じる	1
先輩からの学び		後輩の成長が嬉しい	1	
		先輩の子どもの様子を伝える表現(言葉の)の仕方や援助の仕方を学べるきっかけになる	1	
		先輩が優しく細かく訂正してくださる、表現の引き出しが増えた	1	
		先輩の助けに助けられている、いつもありがとう	1	

ラムを見返す時間が増えたということから、カリキュラムは作成し、終わりではなく、見返すことに意味があると再度気づかされたようである。保育者の見返すという行為が増えることで、より丁寧に子どもの成長を追うことが可能となるのではないか。さらに、見返すという行為により、作成時より深い考察に繋がっていくと考えられる。

(2)「ポートフォリオを導入・運用するにあたり課題となる点」の結果と考察

「ポートフォリオを導入・運用するにあたり課題となる点」をカテゴリ別に分類した結果、「写真撮影や写真選択の難しさ」「書式の構成の問題」「ねらいの問題」「渡すタイミングの問題」「取り組む気持ち」の5つの大きなカテゴリに分類することができた。得られたカテゴリの内容を示したものが図2である。最もコメント数が多かった大カテゴリは「写真撮影や写真選択の難しさ」であり、次いで「書式の構成の問題」「ねらいの問題」という順であった。次項に、大

カテゴリを一つ一つ詳細に見つめたことによる結果と考察を述べていく。

① 写真撮影や写真選択の難しさ

本カテゴリでは、数多くある写真の中から、使用する写真の選択に悩むという意見が多く見られる。これは保育者が常に子どもの成長(姿)に目を向け、心を動かしながら撮影を行っていたことから見えてきた課題であると捉えることができる一方、選ぶことが難しいほど子どもの姿を写真に収めることに集中していたと捉えることもできるのではないか。

本カテゴリに対する保育者の考察からは①良いタイミングで写真を撮れない②伝えたい場面に出会った時にカメラを持っていない③撮影したいときに充電がない④写真の選択が難しいという4つの課題が抽出された。改善策としては、①カメラを常に充電し、持ち歩く。②必要でない写真はすぐに削除するという案が出された。

今回は、写真撮影に集中しすぎていたというよ

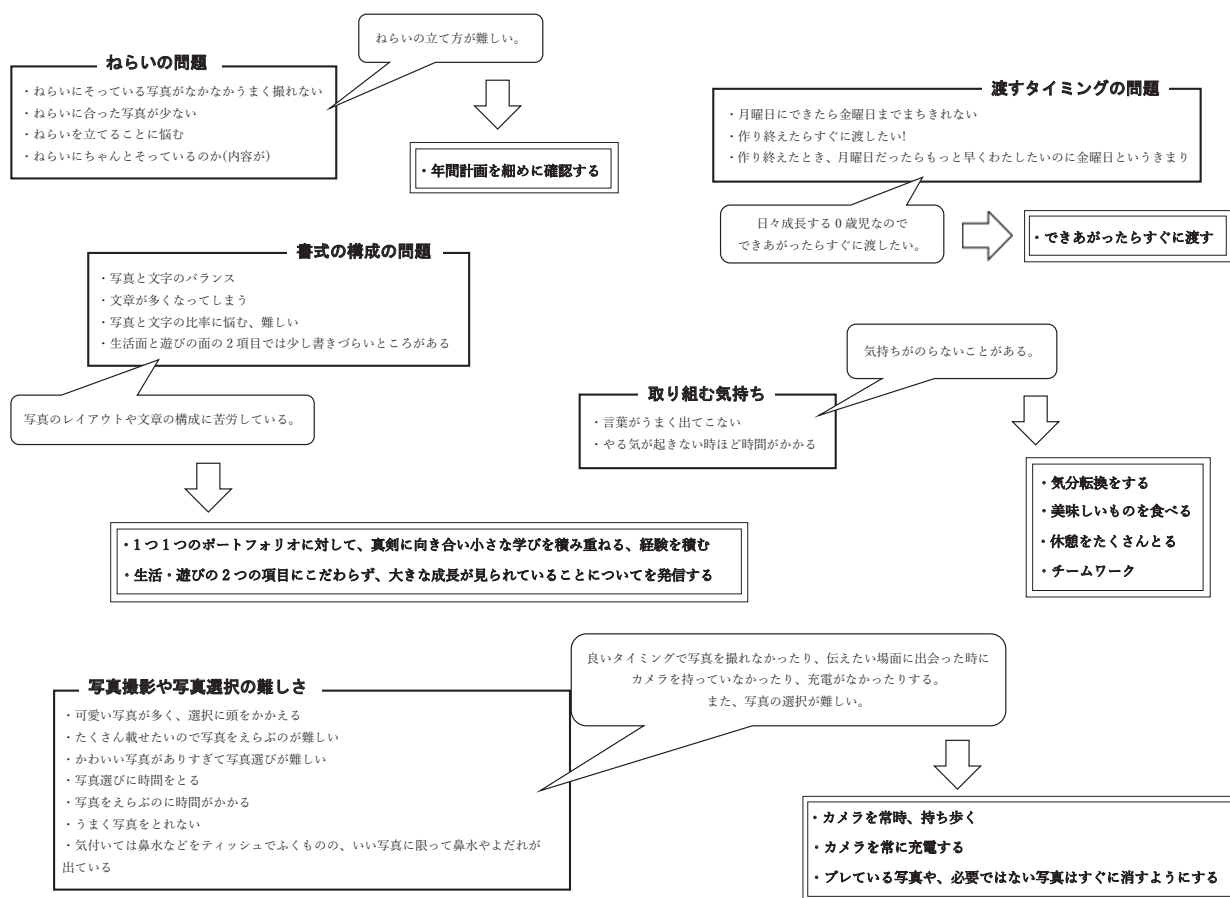


図2 ポートフォリオを導入するにあたり課題となる点のワークシート

表3 「ポートフォリオを導入するにあたり課題となる点」のコメント一覧

カテゴリー	コメント	コメント数
ねらいの問題	ねらいにそっている写真がなかなかうまく撮れない・少ない	2
	ねらいを立てることに悩む	1
	ねらいにちゃんとそっているのか(内容が)	1
書式の構成の問題	文章が多くなってしまふ	1
	写真と文字の比率に悩む、難しい	2
	生活面と遊びの面の2項目では少し書きづらいところがある	1
渡すタイミングの問題	作り終えたとき、月曜日だったらもっと早くわたしたいのに金曜日というきまり	3
取り組む気持ち	言葉がうまく出てこない	1
	やる気が起きない時ほど時間がかかる	1
写真撮影や写真選択の難しさ	可愛い写真が多く、選択に頭をかかえる	3
	たくさん載せたいので写真をえらぶのが難しい	1
	かわいい写真がありすぎて写真選びが難しい	1
	うまく写真をとれない	1
	気付いては鼻水などをティッシュでふくものの、いい写真に限って鼻水やよだれが出る	1

うなコメントはなく、必要に応じて撮影を行っていたと思われるが、写真を撮る頻度は今後ポートフォリオを導入していく上で課題となってくる点ではないだろうか。ポートフォリオを作成しなければいけないという思いが強くなればなるほどカメラを通して子どもを見る時間が増えてしまったり、いい場面を撮影しなければいけないと思えば思うほど実際に行いたい保育とかけ離れてしまったりという危険性も含んでいると考えられる。

② 書式の構成の問題

保育者はポートフォリオを作成する際に、レイアウトや文章の組み立てに苦戦していたようである。保育者がレイアウトに注目している点からは保護者が心を動かされるようなレイアウトにしたいという思いや子どもの姿がより明確に伝わるような工夫がしたいという思いが含まれていた。

保育者から出された改善策としては、①一つ一つのポートフォリオに対して、真剣に向き合い小さな学びを積み重ねる・経験を積む。②生活・遊びの2つの項目にこだわらず、大きな成長が見られていることについて発言するという案が出された。保育者が述べているように、今後も保育者自身の中に課題を持ちながら作成を行っていくことでより効果的な見せ方ができるようになると考えられる。さらに、経験を積み重ねることや保護者とのやり取りを通してポートフォリオの効果的な使用方法についても検討を行っていかねばならない。

③ ねらいの問題

本カテゴリーでは、ねらいの立て方やねらいにあった写真が撮れないといった保育者の声が記されている。また、保育者の改善点として「年間計画をこまめに確認する」とされている。ねらいの立て方に関する課題は新任保育者から出されたものであり、経験の浅さから子どもの成長発達の見通しが持ちにくいために難しさを感じたと推察される。また本課題は、ポートフォリオを導入したことによって新たに生まれたものではなく、今までの指導計画であったとしても課題として挙げられていたことであろう。この新任保育者から伝えられた課題を改善していくためには、年間計画を確認しながらクラスの保育者間で話し合いを密に行い、共に一人の子どもを見つめるという時間が重要であるといえる。今回、新任保育者が気づかせてくれた「ねらいの問題」をどのように改善していくのか。新任保育者の声を聞き、クラス間での検討が必要である。

そして、「ねらいにそっている写真が撮れない」「ねらいに合った写真が少ない」というコメントを見つめてみると、保育者の「子どもがねらいを達成した姿を撮影しなければいけない」という思いが少なからず含まれているようにも見受けられる。保育を行う上で子ども一人一人にねらいを持つことにより、保育者は具体的な援助を考えることができる一方、ねらいにこだわりすぎてしまい「ねらいに沿った写真を撮らなければいけない」「子どもが達成できそうなねらいを立てなければ

いけない」という思いが強くなり、写真ありきで子どもの姿を見る見方へ変化していってしまう危険性も含んでいるといえるであろう。また、保育者が写真ありきの見方に変化してしまっただけではポートフォリオの利点をいかすことは難しいと思われる。さらに、本問題はポートフォリオのみならず、様々な計画を行う際にも課題となるであろう。そこで保育者は「人は少なからず、できる・できないで評価をする見方をもっている」ということを念頭におきながら、ポートフォリオの作成を行うことが必要であろう。

④ 渡すタイミング

A園では、ポートフォリオは金曜日に持ち帰ることになっているが、コメントに記載されているように保育者は金曜日を待たず、作成後すぐに渡したいと考えている。成長が著しい乳幼児（0歳児）であるからこそ、タイミングを逃したくないという思いであろう。A園において金曜日に持ち帰るといふきまりができた背景には「保育者全員が同じ時期に個別指導計画を仕上げたという従来のルール」があるが、成長のタイミングを捉えて作成したポートフォリオをどのように家庭へ返していくかは検討が必要である。保育者は改善点として、「作成したらすぐに渡す」という点を挙げているが、この点においては今後の課題としてどのような頻度で家庭へ返していくのかということや個人によって偏りがうまれないような対策が必要となってくる。

⑤ 取り組む気持ち

本カテゴリーには、「言葉がうまく出てこない」「やる気が起きない時ほど時間がかかる」などのポートフォリオを作成する際の保育者の気持ちに関するコメントが見られる。この2つのコメントからは、ポートフォリオ作成を楽しんでいる保育者であったとしても日によっては気持ちがのらないことがあると理解できる。この課題の改善点を保育者は「気分転換する・美味しいものを食べる・休憩をたくさんとる」と共に「チームワーク」と述べている。このチームワークとは、担当者だけで作成するのはなく、クラスの保育者全員で考える・一緒に作成するという意味が含ま

れていると思われるが、書きたいと思った時にすぐ書ける環境を協力して用意するというのも、まさにチームワークの一つである。

V 総合考察

本研究は、A園0歳児クラスにおいてポートフォリオを活用した際の有効性を明らかにすることを目的として行った。グルーピングを行った結果から、ポートフォリオを活用したことによる効果や今後の課題については一定の知見が得られた。そこで、これらの結果を導き出した要因を本稿Ⅲ-(1)、A園の特徴を踏まえて考察する。

(1) 保育者同士の関係性と保育者の成長

先述した分析結果から、保育者はポートフォリオの作成を通して子どもを見る視点が変わることやクラス間のチームワークが高まったことが明らかとなった。また、ポートフォリオは正規職員・非正規職員関係なく、子どもたちに関わる全ての保育者間で共通した子ども理解を育む大切な資料である。したがって、ポートフォリオは保育者同士を繋ぐ架け橋であり、一人一人の子どもたちが家庭においても園においても安心して成長していくための重要な資料であると言える。

人は不安な環境下である場合、その環境にどう対応しようかということに気を取られ、新たな体験を受け入れることは難しいと言われる。しかし、本実践の中で保育者たちが正規職員・非正規職員関係なく、一つの目的に対して自主性を出し実践を行えたのは安心できる環境下にあった・安心できる環境に身を置いていたからであろう。A園の特徴である「非正規職員も正規職員と同様に子どもの写真を撮影する・一緒に語り合う（評価・反省含む）」という共に考える姿勢が、職員間に安心感をもたらし、新たな学びに繋がったと言えるのではないかと。ポートフォリオの作成を通して、保育者それぞれが互いの姿に刺激を受け、高めあい、心地よい環境（人間関係）を創り出していったようだ。

また、保育者のコメントからは「先輩に助けられている」「後輩の成長を感じる」のように「先輩・後輩」という言葉が多く見られる。このコメントからは、どちらかが一方的に気持ちを伝える

のではなく、互いに伝えあい双方向で思いをやり取りしていたことがうかがえた。「ありがとう」という感謝の感情も双方向のやりとりの中で生まれた思いであろう。人は人を通して成長すると言われる。まさに、この双方向のやりとりがあったからこそ「子どもの姿に共感する見方」や「子どもを多面的に見つめる視点」が生まれていったのであろう。子どもたちの健やかな成長を願う保育者自身が自己の課題に気づき（課題につまずいている自分に気づき）、物事を考え、自身で解決しようとする力を持っていることが重要であろう。

（2）ポートフォリオ作成時間の確保

ポートフォリオ作成が保育者の成長や意欲に繋がった要因には、保育時間帯の作成時間の確保が大きく関わっていることが明らかとなった。A園では、園長・教頭・主幹教諭が中心となり、子どもたちの安全を守りながらも書類作成に取り組める時間帯を把握し、助け合うことで作成時間の確保が可能となった。しかし、数年前の保育現場では、保育時間中に保育者が保育室を抜け書類を作成することや、育児担当制を行っている中で、担当児以外の子どもの指導計画を作成することは考えられなかった。A園において時間の確保等ができた背景には、保育に対する保育者間の話し合い（意見交換）がなされ、一つ一つの物事に対する共通理解がもたれていたからであろう。さらに、子どもに一番身近なクラス担当者が、保育室を離れてポートフォリオを作成できた要因としては、クラスの保育者間の信頼と連携、さらに園長・教頭・主幹教諭や他の保育者との信頼と連携が根底にあったと考えられる。

一方、互いが安心して任せられる環境を整える工夫は、子どもの年齢や姿・クラス担任の構成や保育者の保育観などによっても変化すると予想される。今後は0歳児クラスのみならず、他のクラスにおいても調査を進めていくことで、作成時間の確保について検討していく必要がある。

保育者の業務過多が問題になっている今、残業時間（持ち帰り仕事）を削減することは容易ではないが、A園のように新たに見つめなおす行為を行い、改善していくことは可能であろう。保育者の主体的な学びの過程を育むために、各施設長は

「時間的余裕」と「安心して語り合える環境」を早急に整えていく必要があると示された。

（3）育児担当による子ども理解

「保育者の成長」「子どもへの見方の変化」を生み出した要因は、A園の特徴である「育児担当を導入している」という点であろう。この「育児担当」を取り入れた保育がなされていたことにより、一人一人の子どもの生活（遊び）の過程を丁寧な追った記録を作成することができたと推察する。筆者は「特定の保育者が特定の子どもに継続的に関わり、その過程を見守る」という援助がなされていたからこそ、子ども一人一人の細かな成長に気づくことが可能となり、クラス間での話し合いが意味を成し、多面的にみる視点がいかされたと考える。つまり、西村（2019）が育児担当制は、子どもの行為を細やかに捉えることが可能であると共に、個人の発達段階に適した援助ができる¹と述べるように、さまざまな担当制が存在する中でも、A園の「特定の大人が特定の子どもの生活を見守る」という関わりや援助があったからこそ、ポートフォリオがより有効性を発揮したといえる。

保育の土台は、一人一人の子どもが自身にとっての安全基地を見つけることであり、安心して自己を表現できる環境が用意されていることであろう。その環境（人的）の一つである担当保育者の存在と援助は、子どもの成長を支える上で極めて重要な役割を果たす。現在、保育現場ではグループ担当制や場所の担当制など、さまざまな「担当制^(注3)」が取り入れられているが、今後、各園が自園の担当制が子どもにもたらす効果と課題を再確認することにより、各園独自のポートフォリオの活用方法が見いだされ、深い子ども理解へとつながっていくと考える。

（4）書類の統廃合からみる保護者支援

「保護者とのコミュニケーションの深まり」「保護者の悩みの理解」「保護者の成長」という点について改めて考えたい。保育者のコメントからは、保護者にとってポートフォリオとは、「保育者のコメントを通して直接見ることができない園での子どもを知るツールであり、このツールを通

して子どもを見る視点を考えるきっかけになった」ことや「保育者とのコミュニケーションが深まるきっかけになった」ことがうかがえる。特に、心の内にある思いを相手に伝わる言葉で発することができない0歳児であった場合に、子どもを読み取る視点として、表情や動作（一本一本の指の動き、関節の動き）を読み取ることができるポートフォリオは有効的であるといえる。また、クラスだよりや連絡帳とは異なり、我が子だけに注目して撮影された写真があることや、A4一枚に我が子の様子や我が子を見つめる先生の思いが書き綴ることは保護者にとって喜びであろう。さらに、ポートフォリオは場面に応じて構成変更が可能のため、その都度必要な情報を制限なく記載できたことも保護者が学びの過程を理解できた要因であると考えられる。

神長(2016)が、ポートフォリオの目的はさまざまであり「子どもの学びの履歴を残す」「保護者へ伝達・理解を得る」等があるが、各園が目的を確認し、作成することが重要だ²⁾と述べるように、A園においてポートフォリオが有効性を発揮した大きな要因の一つに、「目的（保護者と保育者をつなぐ双方向のコミュニケーションツールである）が共通認識されていた」ことが挙げられる。また、その目的を達成するために、クラスだよりや個別指導計画の見直しを行ったことも今回の結果に繋がったと考えられる。

一方、保育者からは「レイアウト」の難しさを課題として挙げられているため、この点については今後検討が必要である。

VI 今後の課題

本稿では、A園0歳児クラスにおけるポートフォリオ活用による有効性と課題、また、有効性が発揮された要因について考えてきた。本研究を通して見えてきた今後の課題を次に3点述べる。

1点目は、調査対象についてである。本研究は、A園0歳児クラスにおけるポートフォリオの有効性について調査を行ったが、同じA園であったとしても、子どもの年齢（発達）や保育者の人数やメンバー構成等によって結果が変化してくる可能性があるということである。今後は、条件が異なる場合においても追跡調査を行っていく必要

がある。また今回は、正規職員に調査を行ったが、今後は非正規職員へも調査を行うことで、ポートフォリオが育む「保育者の成長」「保育者同士の関係性」について、より深く検討が可能となると考える。さらに、保護者の声も調査していくことで、ポートフォリオが保育者に与える影響のみならず保護者に与える影響についても明らかにできると考える。

2点目は、ポートフォリオを渡すタイミングについてである。ポートフォリオが保護者にとって子どもの成長を感じるツールや子どもを支える環境を理解するためのツール、相談のツールであるならば、渡す時期や回数は、ポートフォリオを有効的に活用する上で重要な要素となるであろう。タイミングについては、園全体で今後も検討を重ねていくことが必要であり、この検討（対話）を通して、A園独自の新たなポートフォリオの活用方法が見いだされていくことを期待する。

3点目は、本研究はA園におけるポートフォリオ活用の現状と課題を検討したものであり、全ての結果が他の保育施設にそのままあてはまるものではないという点である。本結果は、先にも述べたようにⅢ-(1)のような特徴を持つA園であるから見出すことができた結果であるとも考えられる。今後は、A園のみならず、他の保育施設においてもポートフォリオ活用の現状を調査していく必要があるであろう。

VII おわりに

本研究結果は、今まで当たり前のように必要とされてきたこと（もの）を一度立ちどまって見直し、改善するという過程があったからこそ見出すことができたものである。見直し（再生）・改善という行為を通して保育者間でポートフォリオ作成の目的が共通認識され、共に同じ方向を向き進むことが可能となった。時代は移り変わっている。新しいものを取り入れることにより、今まで大切に守ってきたものを切り捨てることが必要な時もあるであろう。その時をチャンスと捉え、改めて一つのものに向き合い、自分事として考える。この姿勢が保育の質の向上へとつながっていく。教育は人なりと言われるように、保育も人なりである。目の前の子どもや保護者、そして同僚

の姿から今後の指標を見出し、保育に取り組んでいきたいものである。

今後も保育現場の一つ一つの実践（学び）が積み重なり、保育の質向上につながっていくことであろう。本研究が、今まさにポートフォリオに取り組もうとしている保育者の一助となり、それぞれの園におけるポートフォリオの在り方（活用方法）が構築され、子どもへの理解が深まっていくことを願う。

謝辞

ご多忙中にも関わらず、本研究に快くご協力を下さったA園の先生方に心より感謝し、お礼を申し上げます。先生方の優しさと温かさの中で研究を進めることができました。深く感謝いたします。

付記

本稿は、『幼児教育研究会 令和元年度 報告書 令和2年度 提言書』（2020年10月刊行）に掲載された原稿に一部加筆修正を加え、執筆したものである。また、幼児教育実践研究会とは、日本保育協会 石川県支部が石川県から委託を受けて行っている研究会である。

〈注〉

(注1)

A園では、ドキュメンテーションとは運動会や発表会といった行事や大きなテーマのあるあそびについて、時系列で子どもたちの学びの様子を写真付きで紹介したり、保護者懇談会でパワーポイントや動画を使って説明したりして保育を可視化したものをいう。

ポートフォリオとは、3・4・5歳児異年齢クラスではA4用紙一枚に写真付きで毎日の保育の様子を示すことをいう。週案に対応して記録することが多いが、子どものつぶやきや思いがけない行動やあそびについてのももあり、制約はない。また、0・1歳児クラスではA4用紙一枚に写真付きで一人一人の子どもの成長の様子を示すことをいう。月案に対し生活とあそびの両方について記載することで成長の記録とし、毎月保護者からのコメントをもらうことで、双方向のコミュニケーションツールとしている。

(注2)

A園の行う育児担当制とは、主に食事や排泄の援助を特定の大人が特定の子どもに対して、いつも同じ手順で援助を行うことである。また、A園では食事と排泄の手順書があり、それを基に援助を行っている。

(注3)

主にグループ担当制・場所の担当制が挙げられる。西村（2016）によれば、この2つの担当制は、「保育士がテキパキと援助を行っているけれど、子どもに対する言葉がけと保育士の動作が一致することは少なく、一人の子どもに対して、子どもが理解できるような丁寧な保育を行っているとは言い難い」と述べる。

〈主要引用参考文献〉

- 1 西村真実 『育児担当制による乳児保育 子どもの育ちを支える保育実践』中央法規出版株式会社，2019，10-1項
- 2 森真理 『子どもの育ちを共有できるアルバム ポートフォリオ入門』株式会社 小学館，2019，115項
- 3 白石淑江 『スウェーデンに学びドキュメンテーションの活用 子どもから出発する保育実践』株式会社 新評論，2018
- 4 林 悠子「保育実践における「課程の質」－保育記録の分析から－」『佛教大学社会福祉学部論集』第7号，2011，79項

